竹島

水泳と竹島港の歴史

三島竹島学園には学校プールがない。昔から港で水泳の授業をしている。そのため古い水泳授業の写真には、港の様子が奥に見えて、そこから歴史がみえてくる。

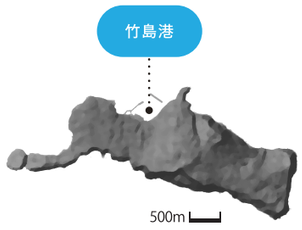
竹島は巨大カルデラの縁であるためか沿岸部がほぼ崖になっている。そのため船着場は、昔から北の長瀬浦と南の籠港に限られた。ただし、長瀬浦は海面下に岩が多く、船は満潮時にだけ入港した。また東北の風が強いときは入港できなかった。籠港は岩に囲まれ穏やかだが、湾から集落の道へ至る道のりが非常に危険だった。

戦後、長瀬浦は竹島港として近代化してゆく Ⓑ。一九六四（昭和三十九）年に護岸工事をして、一九六八（昭和四十三）年には、はしけと貨物を吊り上げる装置を設け、波消しにテトラポッドを配置し、はしけの航路上にある土砂を取り除いた Ⓒ。一九七〇（昭和四十五）年には沖に向かう堤防をつくり、はしけ作業が安全になった。少し前の水泳の写真には、ほとんど構造物が映っていない Ⓐ。

一九八〇（昭和五十五）年には、定期船の接岸を目標に港湾整備が始まり、順次防波堤を延長、船の停泊地も拡げている。この年から水泳の授業は岩場から岸壁内に移動する Ⓓ。その後、水泳の授業は岩壁内に落ち着き、背景はほぼ変わらない。現在は近年増えてきたサメの侵入防止ネットを張って授業をする Ⓔ。

思い出話

「低学年の頃は波にもまれて怖がっていましたが、高学年になって水深七m位の沖側で泳げるようになると達成感を感じてました。」

竹島出身 五〇代　男性

7